令和６年度　香川短期大学
社会人選抜・『小論文』問題用紙

2004年に環境省が発表した環境白書には「環境のわざ」と「環境の心」という言葉が出てきます。以下では、「環境の心」について記述されている一部分を抜き出してみます。

【日本に伝わる「環境の心」】

個別の環境情報が得られ、多少の努力で環境保全に効果があるとわかっても、「自分一人ぐらい」「なぜ自分だけが」と考え、当面の日常生活の快適さを優先することがあります。いわゆる「共有地の悲劇」（コラム参照）のような社会的ジレンマといわれる場合です。これを防ぐため、個人の努力がその人にとっても利益となる誘因を確保することが求められますが、同時に、一人ひとりが社会全体を尊重し、環境を考える心を持つことも重要です。

「環境の心」とは、環境を大切にし、敬う心です。社会のさまざまな人々が互いに支え合い、連携し合うことによって育まれます。「みんなで」「お互いさま」という仲間意識と相互依存関係の理解が、社会的ジレンマの中で生じた「自分一人ぐらい」「なぜ自分だけが」という感情を克服し、全体にとって長期的に最も良い行動を促します。関係者が問題意識を共有し、環境に良いことに向けて協力し合うように、人と人とをつないでいくことが重要です。

この考え方は、必ずしも新しい概念ではありません。日本の歴史をふりかえってみれば、村人が山に入ることに対して、自然への畏敬の念も踏まえ、山林資源の持続可能性を維持するために共同体の風習が作られ、長年にわたって守られ続けた例が多くあります。

こうした、日本古来の「環境の心」を振り返り、地球という共有地の持続可能性について語り合う国際的な議論に参加し、21 世紀にふさわしい「環境の心」を育んでいくことが、これからの日本の役割と考えられます。

コラム　「共有地の悲劇」と環境問題

「共有地の悲劇」は、1968 年にハーディンが発表した行動モデルで、環境問題との関連などで議論されています。共有地である牧草地で人々が羊を飼っている場合、牧草地の容量内において羊を飼育している限り、問題は生じません。しかし、羊を多く飼育して多くの収入を得ようとその頭数を増やしていくと、やがて牧草地の容量を超え、牧草は枯渇します。

個人にとっては、増やした羊分だけ利益が多くなりますが、その一方、牧草の減少により牧草地全体で見れば損失が多くなります。しかし、後者については全体の中に分散するため、個人の経済的利潤のみを追求した場合には、羊を増やすことの方が合理的な判断となり、このようなことが起こります。

これは環境問題にも当てはまります。例えばエアコンの効いた部屋で快適に過ごしたり、自動車に乗ることは、個人の利益の達成ということでは合理的な判断といえます。しかし、多くの人が同じように行動すれば、結局は地球温暖化が進み、多くの人がその被害を受けます。（環境省ホームページより引用）

設　問

上記の文章を読んで、「私が考える環境の心」というテーマで自身の経験も盛り込んだ小論文を作成しなさい。（800 字以内（800 字以内）。

部活動は、生徒が自主的にスポーツ・芸術活動を享受するだけの場にとどまらず、生徒指導の機会や進路形成のきっかけになるなどの教育的役割や、さまざまな社会的役割を担っている。

社会的役割としては次の３点が挙げられる。第一に、中学生にとっての〈学童保育〉の役割を担っている。ほとんどが高校へ進学する現在の中学生はまだ保護者の保護下にある存在である。一方で、社会構造の変化に伴い、保護者の労働時間を中心に生活スタイルは多様化している。このような社会状況にあって、中学生は部活動に加入していれば、平日の放課後や週末も学校で過ごすことができる。第二に、社会的なつながりをつくる役割を担っている。ある調査によると、部活動に加入している中学生が部活動に期待していることとしては「好きなことが上手になる」を抑えて「仲のよい友だちができる」の割合が最も高かった。部活動には自分の好きなスポーツ・芸術活動をしながらも、友だちと過ごしたり友だちをつくったりすることもまた期待されている。第三に、出身家庭の文化的格差の縮減の役割を担っている。再び先の調査によれば、学校外活動に加入してスポーツ・芸術活動をできるかどうかは家庭の経済的背景の影響を受けているが、部活動への加入は家庭背景によらない。部活動は中高生が学校教育活動の一環として少なくても一つはスポーツ・芸術活動を享受できる場であり、出身家庭の経済的背景等の差異に基づく文化的格差を縮減する機会となりうる。

他方で、社会的課題もある。一つは、学校規模差・地域差の問題である。生徒数・教員数等の学校規模、地勢・気候や人口規模等の地域特性によって、提供できるスポーツ・芸術活動種目の数や種類に違いがある。もう一つは、教員の多忙化の要因の一つといわれていることである。そのため、部活動を学校外部の指導者に委ねようという動きが加速している。

（出典『教育社会学事典』丸善出版、385 頁。なお、一部改変している）

設　問

上記の文章を読んで、「私が考える部活動の意義」というテーマで自身の経験も盛り込んだ小論文を作成しなさい。（800 字以内）。